

# 異校種連携によるエシカル消費の学び —高校生による小学生への学びの伝達とその効果—

葎内 ありさ\*

Collaborative teaching on ethical consumption:  
The transmission and effects of learning of high school students when instructed to  
elementary school students

YOSHIUCHI Arisa

## Abstract

Ethical consumption pertains to vigilance about our choices and how they affect the environment and influence human rights. This research investigated the effects of spiral learning on ethical consumption and was conducted between June 2017 and January 2018. There were 120 high school students and 90 elementary school students who participated in the research. High school students gained awareness about child labour in the production of chocolates in their home economics course and created presentations that would introduce the subject to elementary school students. After a presentation competition, 27 high school students were selected as representatives. They visited the home economics classroom of an elementary school to teach a session on child labour. Preparatory meetings were held with the representative students who filled a written questionnaire that comprised 3 questions. Afterwards, post-session meeting was also held with survey of 7 questions. The results of the each survey revealed that the high school students gained in-depth knowledge about child labour through this teaching exercise. They were also inspired by the sincere attitude displayed by the elementary school students with respect to the topic, and were motivated to take action.

Keywords : Home Economics, High School, Consumer education, Ethical consumption, School collaboration

## 1. はじめに

エシカル消費は、環境や人権等、社会に配慮した消費のスタイルである。これは、持続可能な社会の実現を目指す、国連SDGs（持続可能な開発目標）達成のための具体的な行動様式でもある。エシカル消費は、フェアトレード、リサイクル、有機栽培、動物福祉、その他、様々な事柄が含まれる。生産者の労働環境や賃金、児童労働をしていないか、といった、消費の背景に着目し、人権に配慮することもエシカル消費である。

お茶の水女子大学附属高等学校の家庭科では、2011年度より、必修「家庭総合」にて全国に先駆けてエシカル消費を題材とした授業実践に取り組んできた（葎内、2012, YOSHIUCHI, 2017）。2011年度より2015年度では、高校2年生を対象にエシカル消費の授業を行ってきたが、2016年度からは、高校1年生にエシカル消費の基礎学習を行い、2年生のエシカル消費の学習への導入としている。これは、同じ題材を段階的に繰り返して学習するスパイラルな学びを試みるものである。また、高校2年生を対象としたこれまでの研究では、エシカル消費を学んだ後に、他者へ発信することが、生徒が学びを「自分ごと化」し、学びを定着することに効果的であるというこ

---

キーワード：家庭科、高等学校、消費者教育、エシカル消費、異校種連携

\*平成27年度生 人間発達科学専攻

とが明らかになっている。その際、広く一般に向けた発信や、高校内では異学年への伝達も含む発信をおこなってきたが、2016年度からは、附属小学校、2017年度からは小学校に加え、附属中学校家庭科と異校種連携し、高校生の校種横断的な発信の取り組みを試みている。この試みは、2016年度に設立したお茶の水女子大学附属学校連携研究エシカルラーニングラボ部会<sup>1</sup>における連携でもあり、これは、同一キャンパス内に幼稚園、ナーサリー、小学校、中学校、高校、大学、大学院までが設置されている本学の特徴を生かしている。なお、授業実践者は附属高校の家庭科教員である筆者である。上記を踏まえ、本稿では、2017年度の高校生による小学生へのエシカル消費の発信を題材に取り上げる。

先行研究としては、エシカル消費を同一題材として異校種連携により学ぶ研究は、管見の限りではないが、異校種における同一題材を扱った学びに関しては、保健で異校種における心の健康に関する同一課題の実践(高木・増田、2013)、高校生の配膳に関する手作り教材を用いた、高校と小学校が連携した学習(葎内・石原、2013)等があり、複数の異校種連携として、理科実験で中中小高の連携を行ったもの(足立、2011)など、教員による試みの前例がある。塩屋・佐藤(2014)によれば、特に小学校教員の中学家庭科の学習内容に対する理解が不十分であることは、家庭科における連携の不十分さに繋がっているという<sup>2</sup>。

教員による連携や教員の訪問のみではなく、生徒自身が訪問し、教える、または交流する異校種連携も、行われている。家庭科では、高校生が幼稚園へ訪問しての手作り絵本の読み聞かせ(葎内、2013)や、金沢大学で味噌汁作りを幼小中高で連携する交流実践の事例(滝口・綿引・尾島、2016)がある。金沢大学附属校では、学校をあげての異学年、異校種の連携研究が行われ、中学3年生に高校1年生が教える数学の授業実践等も行われた。近年、異年齢の交流が乏しくなっていることを踏まえて、自己表現力や他者理解を必要とするコミュニケーション力の向上を図り、意識的に交流に取り組ませる事例では、特に年長者が学習が進んでいる分野において、交流活動が年長者年少者相互に良い影響を与え、異学年間の理解が進む。一方個人差が大きく、年長者が優位性を保つとは限らない芸術や体育等の科目では必ずしもそうではないという(金沢大学教育学部附属中学校、2007)。長野県の音楽の小中高教員の異校種間連携や交流への意識調査からは、隣接する校種の方が連携しやすいことがわかる(渡辺・舞澤・中山、2009)。

以上を踏まえた、本研究の目的は、エシカル消費という同一題材を扱う異校種連携である、高校生の、小学校への訪問授業が、どのように高校生に影響するのかを検証することである。高校生が小学生へエシカル消費の学びを発信することを通じて、高校生の、家庭科におけるエシカル消費の学びの「自分ごと化」を目指すと同時に、小学生のエシカル消費の導入学習を実現し、小学生の今後の附属中学、高校でのスパイラルな長期的な学びも視野に入れた校種横断的な実践の端となるものである。

## 2. 対象と方法

対象は、O高等学校必修「家庭総合」1年生であり、1クラス40名のA, B, C組の計120名である。連携したのは、O小学校家庭科の授業であり、小学5年生30名のD, E, Fクラスの90名である。実施した期間は、2017年6月～2018年1月である。

方法として、高校1年生の食物分野の授業を扱う際に、児童労働を扱った。その授業を受け、高校1年生は夏休みの課題として、小学生に児童労働を解説するプレゼンテーションを作成した。2017年9月に3クラス別に、全員で発表会を行い、各クラスで9名の代表者を決定した。その後、2018年1月に、訪問メンバーによる、クラス別の事前準備の話し合いを経て、小学校訪問授業を行った。高校生の小学校訪問日は、小学5年D組：2018年1月19日(金)14:35～15:05、E組：1月26日(金)14:35～15:05、F組：1月31日(水)11:35～12:15、である。小学校への訪問授業日程は、小学校家庭科との協議により、バレンタインデーの時期に合わせて、1月下旬に実施されることに決定した。小学校では、事前にフェアトレードチョコレートを用いたお菓子作りの授業が行われた。この際、小学生には児童労働やフェアトレードについての解説は、一切行われず、高校生が訪問授業で初めて小学生に伝えることとした。訪問の各クラス9名の高校生は、3学期に被服実習を行っている家庭科の授業時間中と前後の休み時間等を含めた時間を用いて、担当教員と共に小学校を訪問した。小学校訪問後には、同日に高校生で事後の話し合いを行った。

なお、小学校訪問授業の様子や、高校において実施した、高校生の事前事後の話し合いやアンケートを分析した。小学校の訪問授業と、高校生の事前・事後の話し合いは、録音や録画を行い、分析に用いた。訪問授業に際しては、お茶の水女子大学倫理審査（受付番号2017-123、家庭科における校種横断・アクティブ・ラーニングによる消費者教育の効果検証）を経て実施したものである。

### 3. 高校生の児童労働についての学習

#### 3-1. 高校におけるチョコレート生産の背景に関する学習

高校1年生の家庭科の1学期の授業では、食分野の学習を行っている。この際、栄養素の学習に於いて、脂質を多く含む食品としてチョコレートを扱った際に、さらに、チョコレートの生産の背景として、児童労働について取り上げた。チョコレートの原料となるカカオは、西アフリカを中心に生産されており、日本に輸入されるカカオの77%はガーナ産である<sup>3</sup>。授業では、アフリカ・ガーナのカカオ農園で働く、6歳と11歳の兄弟の短いビデオ<sup>4</sup>を視聴した。

ビデオ内では、働く子どもたちは、チョコレートを見たこともなく、カカオが何になるのかも知らず、危険で過酷な労働に低賃金で従事している。農園で働き始めたのは3年前である、というナレーションにより、弟は3歳から、兄は8歳から働いていることに気がついた生徒から驚きの声が上がった。当初一緒に働き始めた子どもたちの母親は、体を壊し、田舎に帰されている。弟は、自分が一生懸命に働けば、いつか母親と一緒に住むことができるのだと聞いたから、仕事を頑張る、と語る。子どもたちの賃金は、日々の生活費を抜くとほとんど手元に残らない。かつて学校に行ったことのある兄は、その際に用いたたった一本のボールペンを宝物としており、労働は本当に辛い、自分は一生こうして働き続けなければならないのだ、と涙を流す。子どもたちは、このように学校へも行かずに働いているため、将来貧困から抜け出すことも難しいことが予想される状況を描いたドキュメンタリーである。

カカオ栽培や綿花栽培、鉱物採掘など、多くの産業で問題になっている児童労働では、幼少時より、危険な労働や、肉体的に負荷の高い労働、十分な装備のないままでの農薬散布などの過酷な労働に従事した結果、大人になる頃には体を壊し、子どもが働かざるを得ない状況となることも多い。教育を受けられず、貧困の連鎖が起こることも問題となっている<sup>5</sup>。

ビデオ視聴の後、フェアトレードのチョコレートを配布し、高校生が試食した。このチョコレートは、児童労働に反対する活動を行っているNGO<sup>6</sup>が販売しており、売価の30%が児童労働から救い出された子ども達や地域社会のために使われる。チョコレートの原料のカカオ栽培に児童労働が関わっていることは2000年代になって有名となり、児童労働を行っていない、流通経路がはっきりしているカカオ豆から製造されたフェアトレードのチョコレートの販売が、広まってきている。授業で用いたチョコレート1粒毎に付いている、児童労働とカカオ栽培に関する解説リーフレットも生徒に配布された。

次に、夏休みに、小学生にチョコレートを糸口に、児童労働を伝えるためのプレゼンテーションを準備することを家庭科の課題とした。その際、生徒に以下の条件を提示した。プレゼンテーションの時間は5分とし、プレゼンテーションソフトを用いて作成すること、小学生5年生に伝わりやすいようにわかりやすく工夫して作成すること、前半をチョコレートについて、後半を児童労働について、最後に自分達にできること、の構成で作成するように課題とした。また、夏休み明けに高校のクラスでプレゼンテーション発表会を行い、優秀なプレゼンテーションを行った生徒は、実際に附属小学校を訪問して小学生に教える機会があることを伝えた。

#### 3-2. 高校内でのプレゼンテーション発表会

2017年の9月には、高校のA、B、C組3つのクラスそれぞれで、全員でプレゼンテーションの発表会を行った。高校生は4名の10個の小グループに分かれて発表を行った。発表の際には、タブレットPCに入れて各班に配布した、高校生が作成したプレゼンテーションソフトによる発表資料を各班で活用した。次に、小グループから代表に選ばれた10名の生徒がクラス全体で発表した。高校生は評価表で発表者の「話し方」と「内容」を3段階評価し、自由コメントを記入することにより、相互評価を行った。その後、教員で評価表と発表資料を再度確認す

ることにより、最終的に各クラス9名計27名の高校生が小学校訪問者として選出された。

#### 4. 小学校訪問事前の高校生へのアンケートと話し合い

小学校での訪問に先立ち、高校では、訪問の代表生徒への事前アンケートと、アンケート項目に基づく事前準備の話し合いが行われた。日時は、2018年1月19日～23日であり、参加者は、代表生徒と、教員である。事前準備の話し合いの目的は、当日の高校生の動きの確認、児童労働に関する基礎知識との共有と、小学校訪問授業の目標を高校生で構築し、訪問授業への意識喚起することであった。教員は、話し合いが円滑に進むためのモデレーターの役割を担った。話し合いの時間は約20分間である。事前に配布され、高校生が回答を記入して持ち寄った、全部で3問の事前アンケートを元に話し合いが行われた。27名の高校生の事前アンケートの結果は、以下の通りである。

問1は「児童労働について、家庭科でパワーポイントを作る前に知識がどのくらいありましたか。ある人は、それはどのように得た知識ですか。」である。児童労働、という言葉自体を「全く知らなかった」、という回答をした生徒は0名で、「ほとんど知らなかった」、と回答した生徒が14名(52%)、「知識があった」、と回答した生徒が13名(48%)であった。クラス別には格差があり、A組では9名中8名が「知識があった」、と回答し、一方B組では4名、C組では1名の生徒が「知識があった」と回答した。A組で「知識があった」、と回答する生徒が大半となったのは、A組は、2017年の9月に行われた文化祭において、「児童労働」をテーマにしたお化け屋敷のクラス企画を行ったことが大きいと考えられる。2017年度の本校の文化祭は、全校をあげての「エシカル」をテーマとしたものであり、家庭科の学びが発端となったものであった(葭内、2018)。このため、A組は、5月、6月にクラスで企画案を練る段階で、児童労働についてクラス内で周知が進み、児童労働という言葉は知っていても、知識が十分ではなかった生徒も、企画当事者として、理解が深まったと言える。

児童労働という言葉を知った機会は、25名が学校教育で得ており、その時期は小学校高学年から高校まで幅広いものであった。具体的な教科名として上がっていたのは、家庭科、社会科、保健科、であった。B組の生徒8名とC組の7名は、いずれも中学時代に学校で知識を得ていたが、A組は4名が小学生高学年、3名が中学、2名が高校の文化祭を契機に知ったと回答した。このように、A組の代表生徒9名は、小学校高学年という、B,Cクラスの代表生徒よりも比較的に早い時期に児童労働という言葉に触れる機会があった生徒が半分近くいたこと、高校での文化祭企画を通じて実践する機会があったことにより、他の2クラスの生徒に比較して、高校生自身としては、児童労働に知識があるという自己認識につながったと考えられる。

A,B,C組の代表生徒の児童労働に対する元々の知識量に差が見られたことにより、代表生徒に選ばれるような優れたプレゼンテーションを準備できたかどうかと、事前の知識量には関係がなかったと考えられる。

問2は、「パワーポイントを作ってクラスで発表してみて感じたこと(自分について・友人について)」である。高校生の感想として、「一人一人が自分なりに作ってまとめられていて、自分が知らなかったことなども盛り込まれていて、すごいと思った。まだまだ知らなければならないことがたくさんある、と思った。」といったものが見られた。他の高校生の発表を聞くことにより、児童労働についての情報の共有ができ、同じテーマでも異なる情報や視点があることへの気づきや、プレゼンテーションにふさわしい話し方や資料の作り方、他者へ伝えるためのより良い発表方法や自分の発表への反省、児童労働への理解の深まり、といった要素の回答があった。児童労働への理解の深まりでは、ある班では、今後自分たちに何ができるのか、ということでディスカッションが盛り上がったことにより、この後の行動の意欲喚起につながったとの回答も見られた。

問3の、「小学5年生へ教えにいくことについて感じていること」、では、「わかりやすく教えることができるか不安ですが、できる限りのことをしたいと思います。」「教えるという機会は少ないので、楽しみたい。」といったように、中には教えられるか不安を感じる高校生もいながらも、教えにいくことに責任感を持ち、小学生に伝わりやすい具体的な方法を述べるなど、意欲的に意識している回答が多く見られた。また、「私が小学5年のときには、児童労働について、よく分かっていなかったと思う」、といった、自分が小学生だった頃を振り返ることにより、小学生に寄り添う形で伝えようとしているものも見られた。このように、回答では、自分がうまく教えられるかどうか、教えたい、といった点に着目したものが大多数であったが、3名の高校生は、「質問に答え

ることで、私自身も新しいことに気づけるかもしれないからがんばりたい。」「小5の視点からの考えも聞かせてもらい、相互に学びがあればよい。」と言うように、教えることにより、自らも新しい学びを得られるかもしれない期待や、小学生との相互の学び、小学生の意見を尊重しようとする姿勢にまで思考を巡らした。

さらに、事前準備での目標設定では、「小学生にどこまで伝えたいか」、との質問に、まずは児童労働の現状を知ってほしい、理解してほしい、との意見で一致した。

以上のように、事前の話し合いでは、小学校訪問予定の代表高校生達が、事前アンケートの質問について自分の意見を話し合うことで、生徒による児童労働に関する基礎知識の確認、共有に加え、教員による知識の確認や補足が行われ、当日の授業の流れや高校生のモデレーターとしての役割の自覚を促すと共に小学校訪問への意識喚起が行われた。このような訪問前の準備を経て、高校生は、小学生に、まずは現状を理解し、知ってもらいたい、という意欲を持って訪問に臨んだ。

## 5. 高校生による小学校訪問授業

各クラス9名ずつ、3クラスで計27名の高校生は、プレゼンテーションソフトで作成した発表資料データを入れたタブレットPCを全員が携えて小学校を訪問した。授業の進行は主に小学校の家庭科教諭が行い、適宜高校の教員が解説などを補足した。

### 5-1. 小学校での授業の流れ

まず、小学生が着席している各教室に代表高校生9名が訪問し、小学生2、3名のグループに1名の高校生が着席し、お互いに自己紹介を行った。次に、高校生9名の中の代表1名が、全体に向けプレゼンテーションを行った<sup>7</sup>。最初に、用意したプレゼンテーションのうち、前半のチョコレートがどのようにできるかについての解説を行った。プレゼンテーション前半では、カカオとチョコレートの関係を確認した。次に、プレゼンテーション後半では、実は生産の背景に児童労働に支えられている場合があることを小学生に説明した。その後、小学生がプレゼンテーションを聞いて感じたこと、疑問に思ったことや、自分たちには何ができるかを、各グループに着席した1名のモデレーター役の高校生と自由に話す時間を設けた。この際、各グループの高校生は持参したタブレットPCの自分のデータを適宜用いて説明を行った。話し合いで出た意見を全体で発表し共有した後、再び代表高校生によるプレゼンテーションに戻り、自分達にできることについてのまとめの部分について話し、それを受けて各グループで再度話し合いを持った。その話し合いを、各グループの高校生がまとめて発表し、共有した。ここまでで高校生による訪問授業は終了し、高校生は小学生の教室を退出した。その後小学生はまとめの感想を書く時間とした。

### 5-2. 小学校での高校生による代表プレゼンテーション

ここでは、代表高校生が各クラスにて行った代表プレゼンテーションの内容を比較する(表1)。プレゼンテーションソフトによる生徒の総スライド数は、A組15枚、B組13枚、C組10枚であった。全体の流れは、前述のように、作成前に指示があった通り、パート①チョコレートがどのようにできるのか、パート②児童労働、パート③まとめ、の流れで構成されており、いずれも内容からは、高校生が正しく児童労働の課題を理解していることがわかり、また、それぞれの工夫に違いが見られた。

1ページ目のタイトルには、A組は「チョコレートの裏側～児童労働～」と問題を先に取り上げ、B組代表とC組代表は、それぞれ「チョコレートをもっと知ろう!!」、「おいしいチョコレートを食べるために・・・」と、児童労働という言葉は直接は用いず、含みを持たせた表現が見られた。

パート①では、チョコレートの製造過程を説明したのは3クラス共通であったが、A組とC組は冒頭で「チョコレートは好きですか?」と小学生に問いかけ、B組は「色々なところで使われているチョコレート」として、異なる手法で小学生に身近に話を聞かせる工夫が見られた。続いてのスライドでは、A組代表は4枚、B組代表とC組代表は3枚のスライドでチョコレートの製造の方法等を解説し、その後、パート②の児童労働について扱った。A組代表は、カカオ栽培以外の産業でも児童労働が行われていることに触れ、世界における児童労働の人数

表1. 代表プレゼンテーションのスライド内容

スライド	A組代表プレゼンテーション	B組代表プレゼンテーション	C組代表プレゼンテーション
タイトル	チョコレートの裏側～児童労働～	チョコレートをもっと知ろう！！	おいしいチョコレートを食べるために……
パート① P①-S1	Q.チョコレートは好きですか？	色々なところで使われているチョコレート	チョコレートは好きですか？？
P①-S2	Q.チョコレートはどうやってできるか知っていますか？	チョコレートができるまで①	どのくらい食べる？
P①-S3	カカオ豆	チョコレートができるまで②	チョコレートはこうして作られる！！
P①-S4	チョコレートが作られる工程	チョコレートができるまで③	そもそもカカオって何？
P①-S5	日本…チョコレート消費世界6位	原材料であるカカオがどのように作られているか知っていますか？	
パート② P②-S1	カカオを作っているのは、小・中学生くらいの子ども(理由と特徴)	実は…児童労働が関わっているのです。カカオ農家の一部で、児童労働が行われていることが、問題となっていることを知っていますか？？	これ何の写真？(児童労働の写真)
P②-S2	この実は、いったいなになになるんだろう？(カカオを取る子どもの写真)	児童労働の現状	児童労働 →子どもの教育や健康的な成長をさまたげる、法律で禁止されている子どもの労働のこと。(人数、なぜ働くか) ・どれか1つでもあてはまったら児童労働
P②-S3	(サッカーボールや織物工場で働くこどもの写真)	カカオ農園の児童労働(働く子どもの声) →生きていくため、子が親を助けるために働かなければいけない現実がある。 →チョコレートを知らない子どもたちが、児童労働でカカオを収穫している。	・ゴッドフレッドくん ・エマヌエルくん ・ステファンくん (事例やこどもの声)
P②-S4	(児童労働の写真)	・解決のために ・スマイル・ガーナプロジェクト (他の具体案)	
P②-S5	「児童労働」(定義や人数)		
パート③ P③-S1	<日本からできること> ☆「しあわせへのチョコレート」プロジェクト ・「しあわせを運ぶてんとう虫チョコ」 ・映画「バレンタイン一揆」や本で学ぶ→行動に移す ・募金→現地の活動に使われるなど…	私たちができること① まずはじめに、知ること	私たちはなにができる？ ・児童労働について知る ・ボランティアに参加する ・寄付や募金をする ・売り上げの一部が寄付されるチョコを買う
P③-S2	森永製菓のフェアトレードチョコレート	私たちができること② 次に、深めること	まとめ (メッセージ)
P③-S3	6/12 児童労働反対世界デー ストップ！児童労働キャンペーン2017 (具体案)	私たちができること③ そして、行動すること	
P③-S4	わたしたちにできることはたくさんある！！ 身近なことからコツコツと！！		

註：Pはパート、Sはスライドを示す。( )内は筆者補足

を示すことにより、児童労働がチョコレートに限らず様々な事と関係していることを小学生に伝える工夫を行った。一方、B組、C組の代表生徒は人数や児童労働の定義の他、カカオ農園で働く子どもたちの声や、児童労働に従事していた少年の具体的な事例や感情を紹介することにより、小学生の理解を深めようとする工夫を行った。パート③のまとめではいずれのクラスも「私たちにできること」、を扱っているがその内容はクラスによって異なった。A組代表は、「わたしたちにできることはたくさんある!! できることからコツコツと!」というメッセージでまとめた。B組代表は、NGOや企業のプロジェクトとして児童労働から子どもを救うための取り組みや、寄付付き商品の紹介を行い、その後に「私たちにできること」として、1、知ること2、深めること：家族や友達に話す、自分でさらに調べる3、行動すること：フェアトレード商品を買うなど自ら行動すること。を挙げた。3の行動すること、では、「行動に正解も不正解もありません、私たちができることはたくさんあり、可能性にあふれています。そしてできることを見つけるのは自分自身です。ぜひ行動してみてください!」と、ヒントを与え方向性は示しながらも、自分の事柄として自分で考えることの重要性を訴えた。C組代表は知る、ボランティアに参加する、寄付や募金、寄付付き商品の購入、といった事を挙げ、考える事や、「わたしたちにできることはたくさんあります。たとえ小さなことでも、その一歩が大切です! 児童労働をなくすために、その一歩を踏み出しましょう!!」、という促しでまとめた。C組代表の発表では他の2クラスでは見られなかったボランティア、も取り上げられた。

3クラスの高校生のまとめに共通するのは、知ること学ぶことに加え、行動することを挙げ、いずれのクラスも、小さくともできることが多くあるということを強調しており、行動を促すプレゼンテーションが行われた。

## 6. 高校生に対する事後アンケート

訪問授業終了後、高校に戻り、高校生27名は7つの質問の事後アンケートを記入したのち、20分程度の振り返りを行った。事後アンケートの結果は、以下の通りである。

問1「小学5年生にどのようなことが伝わったと思いますか。」では、小学生、児童労働の存在や現状が伝わった、ということ、27名全ての高校生が回答した。さらに、そのうち、自分たちにもできる行動について伝わった、と回答した生徒は19名であった。

問2の、「小学生はどのようなことに興味をもったと思いますか。」では、様々な回答が見られた。18名の高校生が、自分の担当したグループの小学生が、児童労働を無くすための具体的な行動や自分たちに何ができるのかに興味を持っていたと回答し、問1、問2、さらに問5の回答の記述内容を合わせると、全ての小学生グループで、児童労働の現状だけでなく、自分たちができることにまで発展した話し合いが持たれたことが明らかになった。

問3、「小学5年生にどのようなことが伝わりにくかったと思いますか。」には、特になし、とした回答(2人)や、大概のことは伝わった、とする回答(1人)の他、フェアトレードの仕組みについて伝わりにくかった(5名)、ことやフェアトレード品の具体的な購入場所やボランティア加入方法、細かい数値など、高校生が自分の知識不足により伝えられなかった場合があったことがわかった。また、B組のみでは、小学生が、自分がその立場だったらどのように感じるか、というように、児童労働を自分に置き換えて考えることができていなかった、という回答も見られた。

問4の、「訪問してみて」では、27名中20名が訪問して「とても良かった」、7名が「良かった」、と回答し、「あまり良くなかった・良くなかった」は0名であり、全員が小学校への訪問授業に肯定的であった。事前アンケートで児童労働について「ほとんど知識がなかった」と回答した13名のうち、12名が「とても良かった」と回答した。回答にはクラス差があり、A組では「とても良かった」(3名)よりも、「良かった」(6名)との回答が多かったが、B組、C組では1名を除く全員が「とても良かった」、と回答した。

問5での、「問4の理由」については、楽しかった、議論することや教えることにより自分自身の新たな知識の習得や考えが深まった、とするものなどの他、19名の高校生が、小学生が積極的に学び、児童労働に真剣に自ら取り組もうとする姿勢に、自分自身が小学生より学んだ、と回答した。

問6の、「感想」で同様の内容を回答する生徒もおり、問5・6を合わせて、27名中22名の高校生は、小学生

より刺激を受け、時に見習いたい、と感じたことが明らかになった。中には、小学生から質問が出ないグループに配属されたことや、自分の知識不足やモデレーターとしての力不足を感じ、自分の用意した資料を見せても小学生から思ったような反応が得られなかったとした高校生もいたが、それでも伝えるべきことは伝わったとの実感を持ち、訪問が有意義な時間であったと感じたことがわかった。またこのような機会があれば参加したい、と記述した高校生も複数見られた。

問7の「児童労働について考えること」、については、児童労働の内容についての記述のほか、今回の訪問授業で学びがしっかりした知識となった、との回答や、小学生の姿勢に、今までどこか他人事であった児童労働を、自分ごととして捉えるきっかけとなった、などの回答が見られた。6名の高校生が、大人や子どもに児童労働についての教育が必要であると指摘し、自分も具体的な行動につなげたいと10名の高校生が回答した。

## 7. 考察

代表高校生のプレゼンテーションでは、小学生が児童労働の現状や問題点を理解しやすいように、様々な工夫が見られた。プレゼンテーションを受け小グループで行われた話し合いは、高校生と小学生が課題に真剣に向き合う時間となった。

当初高校生が設定した訪問目標は、小学生に児童労働の現状を知って貰う、であった。しかし、その目標よりもさらに発展した、具体的に自分たちにできること、が小学生の関心や議論の中心となった。このことにより、高校生自身も、児童労働という課題意識を高め、小学生の素直な具体的な行動への意欲に触発され、自らも行動したいという意欲を生じさせ、課題を「自分ごと化」させて強める事が出来た。5歳年下の小学生に、上手く教えられるか不安にも感じていた高校生たちも、充実した訪問時のやりとりを楽しいと感じ、小学生の反応から新たな視点を得、学ぶ姿勢に刺激を受けた。当初は小学生から学びたい、と考えていた生徒は3人にすぎなかったが、授業後は22名の生徒が小学生から学んだと答えており、本実践は高校生と小学生の相互の学びの機会となったと言える。高校生は、高校1年生の1学期、2学期、3学期と繰り返し同一題材を扱い、さらに小学生に教えるという機会を得る事で、高校のクラス内の同年齢への発表のみでは得られなかった効果を得ており、スパイラルな学びや、異校種の連携に一定の効果が認められた。

訪問には全ての高校生が肯定的であったものの、小学校に訪問して「とても良かった」ではなく「良かった」と回答したのは27名中7名の生徒であり、そのうち6名はA組の生徒であった。A組では事前準備会の日時に集まらない生徒が多く、後日2、3名で個別の事前準備会を複数回に分けて行なった経緯があり、他クラスよりも事前の姿勢や、準備が不十分だったことが影響したと思われる。訪問授業では、事前の姿勢や準備が大切であると言える。なお、「良かった」と答えた7名のうち、A組の生徒6名は事前知識があり、残るB組の1名は事前にほとんど知らなかった、と答えており、事前知識があるかどうかで高校生の訪問肯定度が異なるわけではなかった。

今回の実践では、小学校を訪問した高校生全員が、児童労働に関する理解度への自己認識の差はあれど、児童労働という言葉自体は授業前に既に知っていた。全く知識のない高校生には同様の経験がどのような効果があるのか、という点や、代表に選ばれない高校生が訪問した場合の効果については、今回は検証する事ができなかった。また、本研究により、高校生より初めて児童労働を学んだ小学生が、今後中学や高校でスパイラルに学ぶことによりどのような効果があるかも、今後の課題と言える。

## 註

1. お茶の水女子大学連携研究エシカルラーニングラボ部会HP：<http://www.p.fz.ocha.ac.jp/renkei/ethicallearning.html>（2018年8月26日最終閲覧）。
2. 家庭科の平成30年3月告知の新学習指導要領では、従来小中のみで揃えられていた必修科目の学習内容が、高校も同領域で区分することにより、小中高の学習の接続がより一層意識されたものとなった。
3. 日本チョコレート・ココア協会「日本の主要カカオ豆国別輸入量推移」[http://www.chocolate-cocoa.com/statistics/cacao/import\\_j2.html](http://www.chocolate-cocoa.com/statistics/cacao/import_j2.html)、（最終閲覧2018年8月26日）より。



4. 授業で視聴したビデオは、<https://www.youtube.com/watch?v=BfB3ZTL3RTw> (2018年8月27日最終閲覧)であり、ここではカカオ農園で搾取される児童労働の子どもたちの様子が描かれる。
5. 児童労働撲滅運動で2014年にノーベル平和賞を受賞したカイラシュ・サティヤルティ氏は、大人よりも安い賃金で従順な子どもを使用することを雇用主が好み、大人が失業していながら、子どもが働いていることを批判している。
6. ACE HP : <http://acejapan.org>. (2018年8月27日最終閲覧)
7. 各クラスで行った1名の代表プレゼンテーションのスライド内容については表1を参照のこと。

## 謝辞

本研究にご協力下さいました本学附属小学校の岡部雅子教諭と、真摯に授業に参加した生徒の皆様に深謝いたします。

## 参考文献一覧

- 足立 敏 (2011) 「液晶」を題材とした理科実験講座：小・中・高・大の連携の実践』『日本理科教育学会 全国大会口頭発表要項』61：pp183.
- 金沢大学教育学部附属中学校 (2007) 「共に学ぶ生徒の育成を目指して：異学年・異校種間交流授業を通じた学び」『金沢大学教育学部附属中学校研究部研究紀要』50：pp1-9.
- 塩谷敬子, 佐藤裕紀子 (2014) 「家庭科教員の他校種理解に及ぼす異校種間交流の影響と小中連携の課題」『茨城大学教育実践研究』33：pp71-79.
- 高木 悦子, 増田 かやの (2013) 「心の健康教育：異校種における同一教材実践の試み」『日本教育大学協会 養護教諭部会 研究集録』48：pp109-116.
- 滝口圭子, 綿引伴子, 尾島恭子 (2016) 「みそ汁作りを中心とする幼小中交流活動を通しての幼児の意識」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』59(0)：pp 61.
- 渡辺亜希子, 舞澤 典子, 中山 裕一郎 (2009) 「音楽科における異校種間連携に関する研究—小・中・高校教員へのアンケート調査の実施とその報告を中心に」『信州大学教育学部研究論集』1：pp55-67.
- 蒔内ありさ (2012) 「エシカル・ファッションを考えよう—「背景」への眼差しを育てる消費者教育」『お茶の水女子大学附属高等学校研紀要』57：pp15-25.
- YOSHIUCHI, A (2017) Learning about Ethical Fashion in Home Economics Classes: Experiences, Lectures, and Information Technology as Tools for Consumer Education, *International Journal of Home Economics, International federation for homeeconomics*, 10(2), 64-76.
- 蒔内ありさ (2018) 「エシカルな文化祭—学びの実践の場としてのあり方を考える—」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』63：pp73-90.
- 蒔内ありさ, 石原愛子 (2013) 「高校家庭科における食文化に関する授業実践—絵本を用いた配膳に関する学習とその効果—」『日本家庭科教育学会56回大会：口頭発表抄録』pp108-109.

